

内田魯庵

斎藤緑雨

斎藤緑雨

「僕は、本月本日を以て目出たく死去つかまつり仕候」とい
う死亡の自家広告を出したのは斎藤緑雨が一生のお別れ
の皮肉というよりも江戸ツ子作者の最後のシヤレの吐き
じまいをしたので、化政度戯作文学のラスト・スパーク
である。緑雨以後真の江戸ツ子文学は絶えてしまった。
紅葉も江戸ツ子作者の流れを汲くんだが、紅葉は平民の
子であつても山の手の士族町に育つて大学の空気を吸つ
た。緑雨は士族の家に生れたが、下町に育つて江戸の気

分にヨリ多く浸っていた。緑雨の最後の死亡自家広告は三馬さんばや一九いっくやその他の江戸作者の死生を茶にした辞世と共通する江戸ツ子作者特有のシヤレであって、緑雨は死の瞬間までもイイ気持になって江戸の戯作者の浮世三分ぶん五厘の人生観を歌っていたのだ。

この緑雨の死亡自家広告と旅順りよじゆんの軍神広瀬中佐の海軍葬広告と相隣りしていたというのはその後聞いた咄であるが、これこそ真に何たる偶然の皮肉であろう。緑雨は恐らく最後のシヤレの吐き栄えぼをしたのを満足して、眼と唇辺くちもとに会心の "Sneer" を泛うかべて苔下にニヤリと脂下やにさがつ

たろう。「死んでまでも『今なるぞ』節の英雄と同列したるは歌曲を生命とする緑雨一代の面目に候」とでも冥土から端書はがきが来る処だった。

緑雨の眼と唇辺くちもとに泛べる“Sneer”の表情は天下一品であつた。能よく見ると余り好いい男振おとこぢりではなかつたが、この“Sneer”が髯ひげのない細面ほそおもてに漲みなぎると俄にわかに活いき活いきと引立ひつて来て、人に由よつては小憎こぞらしくも思い、氣障きざいにも見えたるうが、緑雨の千両は実にこの“Sneer”であつた。ドチラかというと寡言くわげんの方で、眼と唇辺に冷やかな微笑を寄せつつ黙して人の饒おしやべり舌を聞き、時々低い沈着おちつ

いた透徹すきとおるような声でプツリと止めとどを刺すような警句を吐いてはニヤリと笑った。

緑雨の随筆、例えば『おぼえ帳』というようなものを見ると、警句の連発に一々感服するに違いあらずだが、緑雨と話していると、こういう警句が得意の“Sneer”と共にしばしば突発した。我々鈍漢が千言万言列ならべても要領を尽せない事を緑雨はただ一言で窮処に命中するような警句を吐いた。警句は天才の最も得意とする武器であって、オスカー・ワイルドもメーターランクも人気の半ばは警句の力である。蘇峰そほうも漱石も芥川龍之介すけいも頗る

巧妙な警句の製造家である。が、緑雨のスツキリした骨
 と皮の身体からだつき、ギロリとした眼つき、絶間たえまない唇辺くちもとの
 薄笑すべい、惣すべてが警句に調和していた。何の事はない、緑
 雨の風ふうぼう豊、人品、音声、表情など一切がメスのように鋭
 どいキビキビした緑雨の警句そのままの具象化であつ
 た。

私が緑雨を知ったのは明治二十三年の夏、或る温泉地
 に遊んでいた時、突然緑雨から手紙を請取ったのが初め
 てであった。尤もその頃専もっぱら称していた正直正太夫の
 名は二十二年ごろ緑雨が初めてその名で発表した「小説

はっしゅう

八宗」以来知っていた。（この「小説八宗」は『雨蛙』

あまがえる

の巻尾に載っておる。）それ故、この皮肉を売物にして
 いる男がドンナ手紙をくれたかと思つて、急いで開封し
 て見ると存外改たまつた妙に取済ました文句で一向無味
 らなかつた。が、その末にこの頃は談林発句だんりんほつくとやらが流
 行するから自分も一つ作つて見たといつて、「月落烏啼
 霜満天寒さ哉かな——息を切らずに御読下し被下度候くだされたく」と書
 いてあつた。当時は正岡子規がマダ学生で世間に顔出し
 せず、紅葉が淡島寒月あわしまかんげつにかぶれて「稲妻や二尺八寸ソリ
 ヤこそ抜いた」というような字余りの談林風を吹かして

世間を煙けむに巻いていた時代であつた。この時代を離れては緑雨のこの句の興味はないが、月落ちからすな鳥啼ないての調子は巧みに当時の新らしい俳風を罵倒したもので、殊ことに「息を切らずに御読下し被下度候」は談林の病処つを衝いた痛快極まる冷罵であつた。

緑雨が初めて私の下宿を尋ねて来たのはその年の初冬であつた。当時は緑雨というよりは正直正太夫であつた。私の頭に深く印象しているは「小説八宗」であつて、驚くべき奇才であるとは認めていたが、正直正太夫という名からして寄席芸人じみでいて何という理由もなしに当

時売出しの落語家の今輔いますけと花山文かざぶんを一緒にしたような男
 だろうと想像していた。尤もこういう風采ふうさいの男だとは多
 少噂を聞いていたが、会わない以前は通人つうじん気取りの扇を
 パチつかせながらへタヤタラとシヤレをいう気障きざな男だ
 ろうと思っていた。ところが或る朝、突然刺しを通じたの
 で会って見ると、斜子ななこの黒の紋付きに白ツぽい一楽いちらくのゾ
 ロリとした背の高いスツキリした下町の若檀わかだんな那風の男
 で、想像したほど忌味いやみがなかった。キッチンと四角に坐つ
 たまま少しも膝をくずさないで、少し反身そりみに煙草たばこを燻ふか
 しながらニヤリニヤリして、余り口数を利きかずじろじ

口部屋の周囲まわりを見廻していた。どんな話をしたか忘れてしまったが、左とに右かく初めて来たのであるが、朝の九時ごろから夕方近くまで話して帰った。その間少しも姿勢をくずさないでキチンとしていた。一体行儀の好い男で、あぐらを掻かくツてな事は殆んどなかった。いよいよ坐り草くた臥たびれると能よく立膝をした。あぐらをかくのは田舎者である、通人的でないと思っていたのだろう。

それが皮切かわきりで、それから三日目、四日目、時としては続いて毎日来た。来れば必ず朝から晩まで話し込んでいた。が、取留とりとめた格別な咄もそれほど用事もないのに

どうしてこう頻繁に来るのか実は解らなかつたが、一と月ばかり経ってから漸やっと用事が解つた。その頃村山龍平の『国会新聞』てのがあつて、幸田露伴と石橋忍月とが文芸部を担任していたが、仔細しさいあつて忍月が退社するので、（あるいは既に退社していたのか、ドツチだか忘れてしまつたが）その後任として私を物色して、村山の内意を受けて私の人物見届け役に来たのだそうだ。その時分緑雨は『国会新聞』の客員という資格で、村山の秘書というような関係であつたらしく、『国会新聞』の機微に通じていて、編輯部内の内情やら村山の人物、新聞

の経営方針などを来る度毎たんびに精くわしく話して聞かせた。こ
つちから訊ききもしないのに何故なぜこんな内幕うちまく咄ばなしをするの
か解らなかつたが、一と月ばかり経って公然入社こうぜんにゅうしゃの交渉
を受けた時初めて思い当った。この交渉は相互の事情で
それぎりとなつたが、緑雨と私との関係はそれが縁とな
って一時はかなり深く交際した。

尤も私は飲んだり喰ったりして遊ぶ事が以前から嫌い
だつたから、緑雨に限らず誰との交際にも自ずから限度
があつたが、当時緑雨は『国会新聞』廃刊後は定きまつた用
事のない人だつたし、私もまた始終ブラブラしていたか

ら、らん懶惰だという事がお互いの共通点となつて、私の方からは遠い本所ほんじよくんだりほんじよに余り足が向かなかつたが、緑雨は度々やつて来た。来れば必ず一日遊んでいた。時としては朝早くから私の寝込ねこみを襲うて午飯ひるめしも晩飯も下宿屋の不味まずいものを喰つて夜る十一時十二時近くまで話し込んだ事もあつた。

その時分即ち本所時代の緑雨はなかなか紳士であつた。貧乏咄こづかいせんをして小遣錢こづかいせんにも困るような泣言なきごとを能くいつていても、いつでもゾロリとした常綺羅じょうきで、困つてるような気振けぶりは少しもなかつた。が、家を尋ねると、藤堂とうどう

伯爵の小さな長屋に親の厄介やつかいとなつてゐる部屋住へやずみで、自分の書齋らしい室さえもなかつた。緑雨のお父さんというは今の藤堂伯の先々代で絢堯齋けんぎようさいの名で通つてゐる殿様の准侍医であつた。この絢堯齋というのは文雅風流を以て聞えた著名なだの殿様であつたが、頗すこぶる頑固な旧弊人で、洋医の薬が大嫌いで毎日持薬に漢方薬を用いていた。この煎薬せんやくを調進するのが緑雨のお父さんの役目で、そのため薬味やくみ箆だんすが自宅に備えてあつた。その薬味箆やくみだんすを置いた六畳敷ばかりの部屋が座敷をも兼帯してゐて緑雨の客もこの座敷へ通し、外きまに定つた書齋らしい室がなかつた

ようだ。こんな長屋に親の厄介となっていたのだから無
 論気楽な身の上ではなかつたろうが、外出でかける時はイツ
 デモ常綺羅の斜子の紋付に一楽の小袖というゾロリとし
 た服装なりをしていた。尤も一枚こっきりのいわゆる常上じょうじょう
 着ぎの晴着はれぎなしであつたろうが、左とに右かくりユウとした
 服装なりで、看板法被はつぴに篆書崩てんしよくずしの齊の字の付いたお抱え然かか
 たる俵くるまを乗廻のりまわし、何処どこへ行つても必ず俵を待たして置
 いた。例えば私の下宿に一日遊んでる時でも、朝から夜
 る遅くまでも俵を待たして置いた。長尻ながつちりの男だからド
 コへ行つても長かつたが、何処でも俵を待たして置いた

から、緑雨の来ているのは伴待ともまちや玄関や勝手に長々と臥ねそべってる緑雨の車夫で直ぐ解った。緑雨の車夫は恐らく主人を乗せて駈かける時間よりも待ってて眠る時間の方が長かったろう。緑雨は口先きばかりでなくて真実困っていたらしいが、こんな馬鹿げた虚飾みえを張るに骨を折っていた。緑雨と一緒に歩いた事も度々あったが、緑雨は何時いつでもリユウとした黒紋付で跡から俣まがお伴をして来るといふ勢あがいだから、精々せいせいが米琉よねりゆうの羽織てつわくに鉄欄てつわくの眼鏡の風采あが頗る揚あがらぬ私の如きはどうしてもお伴の書生ぐらいにしか見えなかつたであらう。

緑雨が一日私の下宿で暮す時は下宿の不味いお膳を平
 気で喰べていた。シカモ鰯いなだの味噌煮というような下宿
 屋料理を小言云い云い奇麗に平らげた。が、率いざ何処か
 へ何か食べに行こうとなるとなかなか嚴やかましい事をいっ
 た。三日に揚げずに来るのに毎い次つでも下宿の不味いもの
 でもあるまいと、何処かへ食べに行かないかと誘うと、
 鳥は浜町はまちようの筑紫つくしでなけりやア喰えんの、天麩羅は横山よこやま
 町ちようの丸新まるしんでなけりやア駄目だのと、ツイ近所で間に合
 わすという事が出来なかった。家の惣菜そうざいなら不味くても
 好いが、余所よそへ喰べに行くのは贅沢えりごだから選択えりごみをする

のが当然であるというのが緑雨の食物哲学くいものであつた。その頃は電車のなかつた時代だから、緑雨はお抱えの俵が毎い次つでも待つてるから宜いいとしても、ここっちはわわざわざざ高い宿やどぐるま俵ばうで遠方まで出掛けるのは無駄だと思つて、近所の安西洋料理にでも伴つれて行いこうもんんなら何なとなく通人の權威を傷やつけられたといいうような顔かほをした。「通人でもものは旨い物ばかり知しつていて不味い物が解とらんようでは駄目だ」と、或時近所の、今なら七錢均一とか十錢均一とかいいそうな安西洋料理へ案内した時にいいうと、「だから君の下宿のお膳を一生懸命研究けんきゅうしているじゃア

ないか、』と抜からぬ顔をして冷^すましていた。それでも西洋料理は別格通でなかったと見えて、一向通もいわずに塩の辛い不味い料理を奇麗に片附けた。ドダイ西洋料理を旨がる田^{いなかも}舎漢では食物の^{くいもの}咄^{はなし}は出来ないというのが緑雨の食通であつたらしかつた。

本所を引払つて、高等学校の先きの庭の広いので有名な奥井という下宿屋の離れに転居した頃までは緑雨はマダ紳士の格式を落さないで相当な贅をいっていた。丁度上田^{かずとし}万年博士が帰朝したてで、飛^{かすり}白の羽織に鳥打帽という書生風で度々遊びに来ていた。緑雨は相応に影では

悪語わつくちをいっていったが、それでも新帰朝の秀才を竹馬の友として、いるのが万更まんざら悪い気持がしなかったと見えて、咄のついでに能く万年がこういったとか、あアいったとか噂うわさをしていた。

壱岐殿坂の中途を左へ真砂町まさごちようへ上るダラダラ坂を登り切った左側の路次裏の何とかいう下宿へ移ってから緑雨は俄にわかに落魄おちぶれた。落魄おちぶれたといつては語弊があるが、それまでは緑雨は貧乏咄うたをしても黒斜子の羽織を着ていた。不味い下宿屋の飯を喰たっていても牛肉屋の鍋つを突つつくような鄙さもしい所まね為は紳士の体面上すまじきものよう

な顔をしていた。が、壱岐殿坂時代となると飛白の羽織を着^き初^だして、牛肉屋の鍋でも下宿屋の飯よりは旨いなどと弱^{よわ}音^ねを吹^ふき初^だした。今は天麩羅屋か何かになってるが、その頃は「いろは」といった坂の曲り角の安汁粉屋の団子を藤^{ふじ}村^{むら}ぐらいに喰^くえるなぞと行って、行^いくたんびに必^{かなら}ず団子を買^かって出^でした。

壱岐殿坂時代の緑雨には紳士風が全^{まる}でなくなつてスツカリ書生風となつてしまつた。竹馬の友の万年博士は一躍専門学務局長という勅任官に跳^は上^あつて肩で風を切る勢いであつたから、公務も忙がしかつたらうが、二人の間

に何か衝突もあつたらしく、緑雨の汚ない下宿屋には万
 年博士の姿が余り見えなかつた。何かにつけて緑雨は万
 年博士を罵ののしつて、愚凶愚凶いやア万年泣拝という手紙
 を何本も発表してやると力りきんでいた。その代りに当時は
 マダ大学生であつた佐々さつ醒雪せいせつ、笹川ささかわりんぷう臨風、田岡れいうん嶺雲とい
 うような面々がしばしば緑雨のお客さんとなつて「いろ
 は」の団子を賞しょうがん翫した。醒雪はその時分さんさん麩々たる黒い
 髯たを垂れて大学生とは思われない風采であつた。緑雨は
 佐々弾正と呼んで、「昨日弾正が来たよ、」などと能よく
 いったもんだ。緑雨の『おぼえ帳』に、「鮪まぐろの土手どての

夕あらし」という文句が解らなくて「天下豈鮪あにを以て築きたる土手あらんや」と力んだという批評家は誰だか忘れたがこの連中の一人であつた。緑雨は笑止おしがかつて私に話したが、とうとう『おぼえ帳』の一節となつた。

上田博士が帰朝してから大学は俄に純文学を振つて『帝国文学』を発刊したり近松研究会を創はじめたりした。緑雨は竹馬の友の万年博士を初め若い文学士や学生などと頻しきりに交際していたが、江戸の通人を任ずる緑雨の眼からは田舎出の学士の何にも知らないのが馬鹿げて見えただのは無理もなかつた。若い学士の方でも緑雨の社会通

を相当に認めて、そういう方面の解らない事があるとし
 ばしば緑雨の許もとに訊きに来たもんだ。万年博士が『天てんの
 網島あみじま』を持って来て、「さんじやうばつからうんころと
 つころ」とは何の事だと質問した時は、有さすが繋の緑雨も閉
 口して兜を抜いで降参した。その頃の若い学士たちの
 馬鹿々々しい質問や楽屋落おちや内緒咄すっぱぬの剔す抉つきが後の『お
 ぼえ帳』や『控え帳』の材料となったのだ。

何でもその時分だった。『帝国文学』を課題とした川
 柳をイクツも陳ならべた端書を續いて三枚も四枚もよこした
 事があった。端書だからツイ失なくしてしまつて今では一

枚しか残っていないが、「上田の附文標準語つけぶみに当惑し」、

「先生の原稿だぞと委員云ひ」というようなのがあった。

前者は万年博士が標準語に関する大論文を発表した際
で、標準語という言葉がその頃の我々の仲間の流行語と
なっていた。また誰かの論文中“Chopin”をチヨピンと
書いてあったので、「チヨピンとはおれが事かとシヨパ
ン云ひ」という川柳が出来たが、この作者は緑雨であつ
たか万年博士であつたか忘れてしまった。『門三味線かどじやみせん』
を作ったのもこの壱岐殿坂時代であつて、この文句が今
の批評家さまに解つたら一大事だなどと皮肉をいいつつ

会心の文句を読んで聞かした事があった。

森川町の草津の湯の傍の簾藤すどうという下宿屋に転じたのはその後であった。この簾藤時代が緑雨の最後の文人生活であった。（小田原時代や柳原時代は文壇とはよほど縁が遠くなっていた。）緑雨が一葉の家へしげしげ出入でいりし初めたのはこの時代であって、同じ下宿に燻くすぶっていた大野洒竹しやちくの關係から馬場孤蝶、戸川秋骨というような『文学界』連と交際を初めたのが一葉の家へ出入する機会となったのである。その頃から私とは段々疎遠となつて余り往来しなくなつたゆえ、その頃からの緑雨の晩

年期については殆んど何にも知らない。

余り憚りなくいうと自然暗黒面を暴露するようにな

るが、緑雨は虚飾家といえは虚飾家だが黒斜子の紋付きを着て抱え俵を乗廻していた時代は貧乏咄をしていても氣品を重んじていた。下司な所為は決して倣なかつた。何処の家の物でなければ喰えないなどと贅をいつていた代りには通人を氣取ると同時に紳士を任じていた。

奥井から壱岐殿坂へ移つて、紳士風が抜けて書生風となつてからもやはり相当に見識を取つていて、時偶は鄙しい事を口にしても決して行かう事はなかつた。かつ中学

へ通う小さい弟（今は医学士となっている）と一緒に暮
 していたから自然謹慎していた。緑雨の耽溺^{たんでき}方面の消息
 は余り知らぬから、あるいはその頃から案外コソコソ遊
 んでいたかも知れないが、左^とに右^かく表面は頗る真面目で、
 目に立つような遊びは一切慎しみ、若い人たちのタワイ
 もない遊びぶりを鼻頭^{はなのさき}で冷笑^{せせらわら}っていた。或る楼^{うち}へ遊び
 に行ったら、正太夫という人が度々遊びに来る、今晚も
 来ていますというゆえ、その正太夫という人を是非見せ
 てくれと頼んで、廊下^{ろうか}鳶^{とんび}をして障子の隙^{そつ}から窺^{もくぎよ}と覗
 いて見たら、デクデク肥^{ふと}った男が三枚も蒲団を重ねて木魚

然ぜんと安座あぐらをかいて納まり返っていたと笑っていた。また或る人たちが下司かな河岸遊かしびをしたり、或る人が三ツ蒲団の上で新聞小説を書いて得意になって相方あいかたの女に読んで聞かせたり、また或る大家が吉原は何となく不潔なよ
うな気がするといいつつも折々それとなく誘いの謎を掛
けたり、また或る有名な大家が細君にでもやるような手
紙を女郎によこしたのを女郎が得意になってお客に見せ
びらかしてるといふような話をして、いわゆる大家先生
たちも遊びに掛けると存外な野暮やぼで、田舎臭くて垢ぬけ
がしないと嘲あざけっていた。それから比べると、文壇では

大家ではないが、或る新聞小説家が吉原へ行っても女郎屋へ行かずに引手茶屋ひきてぢややへ上つて、十二、三の女の子を集めてお手玉をしたり毬まりをついたりして無邪気な遊びをして帰るを真の通人だと称揚していた。少くも緑雨は遊ぶ事は遊んでもこの通人と同じ程度の遊びだと暗におに匂わして他の文人の下等遊びを冷笑していた。壱岐殿坂時代の緑雨はまだこういう垢抜けした通人的気品を重んずる風が残っていた。

簾藤すだうへ転じてからこの気風まろが全まるで變つてしまった。服装なりも書生風よりはむしろ破落戸ごろつき——というと語弊があ

るが、同じ書生風でも墮落書生というような気味合があった。第一、話題が以前よりはよほど低くなった。物質上にも次第に逼迫ひつぱくして来たからであろうが、自暴自棄の気味で夜泊よどまりが激しくなった。昔しの緑雨なら冷笑しそうな下等な遊びに盛んに耽ふけったもので、「こんな遊びをやるようでは緑雨も駄目です、近々看板を卸してしまいます、」と下等な遊びを自白して淋しそうに笑った事があった。その頃緑雨の艶聞がしばしば噂された。以前の緑雨なら艶聞の伝わる人を冷笑して、あの先生もとうとう恋の奴やつことなりました、などと澄ました顔をしたもんだ

が、その頃の緑雨は安価な艶聞を得意らしく自分から臭わす事さえあつた。

小田原へ引越してから一度上京したついでに尋ねてくれた。生憎あいにくく留守で会わなかつたので、手紙を送ると直ぐ遣よこしたのが次の手紙で、それぎり往復は絶えてしまった。緑雨の手紙は大抵散逸したが、不思議にこの一本だけが残ってるから爰ここに掲げて緑雨を偲しのぶたねとしよう。

言文一致ニカギル、コウ思附イタ上ハ、基礎ヤ標準ヤ二頓着とんじやくスルマデモアリマセヌ、タダヤタラニオ

ハナシ体ヲ振廻シサエスレバ、ドコカラカ開化ガ参
 リマスソウデ、私モマケズニ言文一致デコノ手紙ヲ
 シタタメテ差上ゲマス、今ニ三輪^{みわ}田^た君ノ梅見ニ誘ウ
 文、高津君ノ悔ミノ文ナドヲ凌駕^{りようが}スルコトト思召^{おもしめ}シ
 下サイ

久シクオ目ニカカリマセヌガ、コレハアナタニバカ
 リデナク、ドナタニモ同ジコトデ、先日チヨツト露
 伴君ヲタズネマシタノサエ二年ブリト申スヨウナ訳
 デス、昔ハ御機嫌伺イトイウ事モアリマシタガ、今
 デハ御気焰^{ごきえん}伺イデスカラ、蛙鳴ク小田原ツ子ノ如キ

ハ、メツタニ都へハ出ラレマセヌ、コノゴロ御引越
 ニナリマシタソウデ、区名カラ申シマスト、アナタ
 モヤハリ牛門ノ一傑デアラセラルルヨウナ事デ、先
 ゴロ弟ヲ喪うしなイマシタノデ、イロイロ片附ケモノヲ
 致シマシタ、即チ財政整理デ、ソノ節『我樂多文庫』
 ヲ見出シマシタカラ、遅おそマキナガラ返上ニ及ビマシ
 タノデ、仰セノ通リアノ時分ノコトヲオモイマスト、
 何ダカオカシクナリマス
 病氣ヲオタズネ下サイマシタガ、コレハ重イトイエ
 バ重イ、軽イトイエバ軽イ、ドチラニモナリマスノ

デ、カノ本復スルカト思エバ全快スノ方ノ組デス、
当所へ参リマス前、およ凡ソ半年ホドヲくげぬま鵜沼ニ辛棒シテ
オリマシタガ、無論ドツトネテイルトイウデハアリ
マセズ、ソレガカエツテ苦痛デハアリマスガ、昨今
デハマズマズ健康ニチカイ方デス

文壇モ随分妙ナモノニナツタデハアリマセヌカ、才
人ゾロイデ、豪傑ゾロイデ、イヤハヤ我々枯稿連ハ
口ヲ出ス場所サエアリマセヌ、一ツ奮ツテナドト思
ウコトノナイデモアリマセヌガ、何分オソロシサガ
先ニ立チマスノデ、ツイツイ遠クカラ拝見シテイル

トイウヨウナコトデ、コレデ無難ニ飯ガクエレバ、
 コンナラクナ事ハアリマセヌ、慾ニハ私モ東京ニイ
 テ、文芸倶楽部ノ末ノ方ニアルヨウナ端唄はうたヲツクツ
 テ、竹富久井アタリニ集会シテイマシタラ、モウ一
 倍ラクナ事ダロウト思イマス

近ゴロノ私ノ道楽ハ、何デモオモイ浮うかンダコトヲ書かき
 ツケテオイテ、ソレガドレダケノ月日ヲ経タラ、フ
 ルクナルカト申スコトヲ試験シテオリマス、何ヲオ
 隠シ申シマシヨウ私モ華族ノ二男ニハ生レマセヌノ
 デ、白米氏ニ敗ラルル点ニオイテハ御同様デス

何カ書クコトガモツトアツタツモリデシタガ、丁度妹ノモトカラ電報ガ今届キマシテ、急ニ出立ノヨウイニカカリマスノデ、コノ辺デヤメテ置キマス、シリキリトンボ。乱筆御用捨

三十日

齋藤

内田様

コウ書イタマママデ電車ニ飛乗リマシタノデ、今日マデ机ノ上ニ逗留とまりゆうシテオリマシタ、昨夜帰宅イタシマシタバカリデ今マタ東京ヘ立ちマスノデ書直スヒマガアリマセヌ、ナゼソンナニアワテルカト才思召

シマシヨウガ、ソレハ明後日アタリノ新聞広告ニ出
 マス件ト、妹ノ方ノ件ト二ツノ急要ガアルタメデス、
 オユルシ下サイ
 五日正午

緑雨の失意の悶々もんもんがこの冷静を粧よそおった手紙の文面に
 もありあり現われておる。それから以後は全く疎縁にな
 ってしまった。

その後再び東京へ転住したと聞いて、一度人伝ひとづてに聞い
 た浅草の七曲ななまがりの住居を最寄もよりへ行つたついでに尋ねたが、
 ドウしても解らなかつた。誰かに精しく訊いてから出直

すつもりでいると、その中に一と月ほど経って、「小生事本日死去仕候」となった。一代の奇才は死の瞬間までも世間を茶にする用意を失わなかったが、一人の友人の見舞うものもない終焉しゆうえんは極めて淋しかった。それほど病気が重くなつてるとは知らなかったもので、最も一度尋ねるつもりでツイそれなりに最後の皮肉を訊かずにしまったのを今なおのこりお残惜しく思っている。葬儀は遺言さぶんだそうで営まなかったが、緑雨の一番古い友達きもいりの野崎左文と一番新らしい親友の馬場孤蝶との肝煎きもいりで、駒込の菩提所で告別式を行った。緑雨の竹馬の友たる上田博士も緑雨の第

一の知己なる坪内博士も参列し、緑雨の最も莫逆ぼくげきを許した幸田露伴が最も悲痛なる祭文を読んだ。丁度風交りの雨がドシヤドシヤ降った日で、一代の皮肉家緑雨を弔うには極めて相応ふさわしい意地の悪い天気であった。

緑雨の全盛期は『国会新聞』時代で、それから次第に不如意となり、わざわざ世に背そむき人に逆らうを売物としたので益々世間から遠ざかるようになった。元来緑雨の皮肉には憎にく気がなくて愛嬌があつた。緑雨に冷笑されて緑雨を憎む気には決してなれなかつた。が、世間から款待もてはやされて非常な大文豪であるかのように持上げられて自

分を高く買うようになってからの緑雨の皮肉は冴^{さえ}を失つて、或時は田舎のお大尽のように横柄^{おうへい}で鼻持^{はなもち}がならなかつたり、或時は女に振棄^{ふりす}てられた色男のように愚痴^うツぽく厭味^{いやみ}であつたりした。緑雨が世間からも重く見られず、自らも世間の毀誉褒貶^{きよほうへん}に頓着^{とんちやく}しなかつた頃は宜^よかつたが、段々重く見られて自分でも高く買うようになると思ふと評判とに相応^{あうおう}する創作なり批評なりを書かねばならなくなるから、苦しくもなり固くもなつた。同時に自分を案外安く扱^{あつか}う世間の声が入ると不愉快^{ふげき}で堪^{たま}らなくなつて愚痴^うを覆^{くは}すようになった。緑雨の愚痴^うは壱岐殿坂

時代から初まったが、それ以後失意となればなるほど世間の影口かげぐちに対する弁明即ち愚痴がいよいよ多くなつた。

私が緑雨と次第に疎遠になつたのは緑雨の話柄が段々低級になつて嫌気いやぎがさしたからであるが、一つは皮肉の冴を失つた愚痴を聞くのが気の毒で堪らなかつたからだ。

緑雨は逍遥や鷗外と結んで新らしい流れに棹さおさしていった。が、根が昔の戯作者系統であつたから、人生問題や社会問題を文人には無用な野暮臭い穿鑿せんさくと思つていた。露骨にいうと、こういうマジメな問題に興味を持つだけの根柢を持たなかつた。が、不思議に新らしい傾向を直

覚する明敏な頭を持っていて、魯文門下の「江東みどり」
 から「正直正太夫」となると忽ち逍遥博士と交を訂し、
 続いて露伴、鷗外、万年、醒雪、臨風、嶺雲、洒竹、一
 葉、孤蝶、秋骨と、絶えず向上して若い新らしい知識に
 接触するに少しも油断がなかった。根柢ある学問はなか
 ったが、不断の新傾向の聡明なる理解者であった。が、
 この学問という点が緑雨の弱点であって、新知識を振廻
 すものがあると痛く癢に触るらしく、独逸語や拉丁語
 を知っていたって端唄の文句は解るまいと空嘯いて、
 「君、和田平の鰻を食った事があるかい？」などと敵

を討ったもんだ。

緑雨の傑作は何といつても『油地獄』であろう。が、緑雨自身は『油地獄』を褒めるほような批評家さまだからカタキシお話しにならぬといつて、『かくれんぼ』や『門三味線』を得意がっていた。『門三味線』は全く油汗を搾しぼって苦辛くしんした真に彫心鏤骨るこつの名文章であつた。けれども苦辛というは修辭一点張であつたゆえ、私の如きは初めから少しも感服しないで明らさまに面白くないといつと、頗おしなる不平で、「君も少し端唄の稽古でもし玉え、」と面白くない顔をした。緑雨のデリケートな江戸趣味か

らは言文一致の翻譯調子の新文体の或るものは氣障きざいであつたり、或るものは田舎臭いなかぐさかつたりして堪らなかつたようだ。

が、緑雨の傑作はやはり『油地獄』と『雨蛙』である。この二つはいずれも緑雨自身の不得意とする作で、人の褒めるのが癪さかに触るといつて喰くつて掛かつたものであるが、緑雨が自ら得意とする『かくれんぼ』や『門三味線』よりは確たしかに永遠の生命がある。聡明な眼識がんしきを持つていたがやはり江戸作者の系統を引いてシヤレや小唄の粹まことを拾ひろつて練りに練り上げた文章上の「穿うがち」を得意と

し、世間に通用しない「独りよがり」^{ひと}が世間に認められないのを不満としつつも、誰にも理解されないのをかえって得意がる気味があった。が、紅葉も露伴も飽かれた今日、緑雨だけが相変わらず読まれて、昨年縮印された全集がかなりな部数を売ったというのは緑雨の随喜者が今でもマダ絶えないものと見える。緑雨は定めし苔^{こけ}の下でニヤリニヤリと脂下^{やにさが}ってるだろう。だが、江戸の作者の伝統を引いた最後の一人たる緑雨の作は過渡期の驕児^{きょうじ}の不遇の悶えとして存在の理由がある。緑雨の作の価値を秤量^{しようれいよう}するにニーチェやトルストイを持出すは牛肉の香

味を以て酔の物を論ずるようなものである。緑雨の通人的観察もまたしばしば人生の一角に触れているので、シミツ垂れな貧乏臭いプロの論客が鼻を衝く今日緑雨のよ
うな小唄で人生を論ずるものも一人ぐらいはあってもイ
イような気がする。が、こう世の中が世智辛せちがらくなつては
緑雨のような人物はモウ出まいと思つと何となく落莫らくぼくの
感がある。

(大正十四年三月一日補訂)

日本文学電子図書館

斎藤緑雨

著 者：内田魯庵

制作者：宮澤一郎

底 本：「新編 思い出す人々」
岩波文庫、岩波書店

1994年2月16日 第1刷発行

日本文学電子図書館